

つつじは日本の初夏を彩る花の一つです。梅や桜が散ったあとの季節に近所の植え込みや公園、お寺などで目を楽しませてくれます。ところで、花は散り方によって、①花の形を保ったまま散るものと、②花びらが1枚ずつバラバラに散るものがあることをご存じですか？ 今回のテーマである「つつじ」は前者です。後者には桜や山茶花（さざんか）などが挙げられます。さて、今回のお話は「散りつつじ」を見かけたところから始まります。

散歩道での発見

先日近所を散歩しているとき、道路脇の植え込みからたくさん落ちた「つつじの花」を見て足が止まりました。「この花、どうして横倒しにならずみんな伏せたような形（下向き）で落ちているのだろう？」「なぜ地面に落ちた時点で下向きにそろうのだろう？」「それとも、一度横倒しに着地した花も何らかの理由で下向きにそろってしまうのだろうか？」

すべての花が下を向いて散るのは不自然なので、散ったあとで下向きにそろうのだろうと考えました。「きっと横倒しに着地した花は、吹く風に起こされて下向きになるに

違いない。実は下向きに伏せたつつじの姿勢はとても安定していて、いったん下向きになったら横倒しに戻らないのではないか…」という想像（仮説Ⅰ）でした。もしもこの想像が当たっていたら、風のなかでも倒れにくい構造物を設計するときに役立つかもしれないなどと妄想を広げていました。

意外な展開

しかし数日後、後輩のA君や家族に意見を聞いてみたところ、「落ちるときに花がうなだれることはありませんか？」とか「散る寸前の花がぶら下がっているのを見たことがある」という新説や証言を得ました。

そんな新説も頭において歩いていたところ、決定的な光景を目にしたのでした。散る寸前の花が抜けてめしべの先に引っ掛かっているのです。花がそのままめしべから抜け落ちたら、下向きに伏せた形になるのも道理です。はじめに「すべての花が下を向いて散るのは不自然」と考えたのがとんだ思い込みだったようです。つつじの花は散る直前めしべの先にぶら下がり、それから落ちる（仮説Ⅱ）のでした。思い違いの原因は、落ち方をいろいろ考える早

つつじの謎

技術開発本部
内田 博幸



色とりどりの満開のつつじ

い段階で、花が落ちる途中よりも落ちたあとの振る舞いに考えが縛られてしまったことでした。それでも今回は後輩や家族の考えによって救われました。

意外な出会い

この小文を書いている途中で寺田寅彦の随筆集『椿の花に宇宙を見る』（夏目書房、1998）のなかに「思出草」という短いエッセイを見つけました。そのなかで椿の落花に触れられており、何と椿の花はつつじとは逆に上向きに散るのだそうです。地球物理学者でもあった寺田寅彦は落花する過程の連続写真まで撮影して、たとえ下向きに落ち始めても、途中でひっくり返って上向きになって落ちることを実証したようです。その季節になったら、是非この目で椿の花がひっくり返る瞬間を確かめたいものです。ちなみに、椿の話の冒頭で夏目漱石の俳句が引用されています。

～落ちざまに^{あぶ}虻を伏せたる椿哉～

上向きに咲いた椿の花が虻を乗せたまま散る途中で、虻の重さでひっくり返って虻を下敷きにした、という何ともコミカルながら悲哀を伴う俳句です。この場合は虻の重さのせいで下向きに落ちたというわけです。

尽きない興味

そもそも何のためにつつじのような落ち方をするのか、という生物学的興味もあります。このように散ったほうが子孫を増やすのに都合がよいのでしょうか？ 学術論文誌で落花ではなく落種の研究例は見たことがあります。かえでなどの実（種）には一つひとつ羽根がついていて「翼果」と呼ばれます。竹とんぼ（の半分）のようにクルク



散る寸前のつつじ

ル回りながら落ちるので木の枝からストンと真下に落ちるよりも地面に着くまでの時間を稼ぐことができ、種を風に乗せて遠くまで運ぶための賢い仕組みといわれています。つつじの花にも未知の秘策が隠されているかもしれません。

しかし、つつじの謎はもちろんまだ解明されたわけではありません。仮説Ⅰが全く否定されたわけでもありません。下向きに落ちた花がひっくり返らない理由は仮説Ⅱでは説明できません。また、高い位置から落ちた花が空中で同じ姿勢を保ったまま着地するでしょうか？むしろ寺田寅彦が研究した椿のように上に開いた形で落ちてくるほうが自然にも思えます。どこかで背の高いつつじの木を見つけて観察したいものです。いやはや落花の様子一つとっても興味は尽きないものです。

（写真：内田博幸）



道ばたに散ったつつじ